



Title	＜紹介＞高山善行・青木博史編『ガイドブック日本語文法史』
Author(s)	岩田, 美穂
Citation	語文. 2011, 96, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69178
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

高山善行・青木博史編『ガイドブック日本語文法史』

岩田美穂

本書は、高山・青木両氏が編者となり、他に小柳智一氏、近藤要司氏、西田隆政氏、福田嘉一郎氏、吉井健氏、米田達郎氏を執筆者に迎え、日本語文法史の要点をテーマ別に解説したものである。

各章で扱われているテーマは、まず、文法の基礎となる、「文の構造・タイプ」、「活用」、「格」などである。また、近年文法史研究においてとりわけ盛んに取り上げられるようになった「ヴォイス」、「テンス・アスペクト」、「モダリティ」、「とりたて」といったテーマが続く。それだけでなく、「係り結び」や「準体句」「待遇表現」といった伝統的な国語学の時代から研究が積み重ねられてきた定番のテーマから、これまであまり研究が進んでいない「談話・テクスト」「文法史と方言」といった幅広い観点から古典語を捉えたテーマまでも揃う。本書一冊でもって、現在文法史研究において扱われるほぼすべてのテーマを網羅的に学ぶことが出来ると言える。

「ガイドブック」と冠している通り、初学者、及び文学や日本語教育などの専門外の人にとって有用であるようにとの配慮が随所に見られる。用語を丁寧に説明し、現代語訳の付された用例の分類・分析が行われた上で史的変遷のポイントがまとめられるな

ど、読みながら理解しやすい構成になっている。

本書の大きな特徴の一つに「研究テーマ」として今後の研究における課題が提示されていることがある。例えばモダリティの章では、「ベシ」の意味が英語の法助動詞の区別と類似する点があることが示されている。この指摘は単なる対照研究の材料としてだけではなくモダリティそのものの根底にある一般性を捉えることができる可能性をも示唆しているように思われる。準体句の章では、単なる準体句の解説だけでなく関連する文法現象として節と節との構造変化についても言及されている。また、敬語史においては、一般的に絶対敬語から相対敬語へ変化したとされるが、中古のコミュニティの制約などから相対敬語の要素の可能性も示されている。これらの研究テーマにおける問題提起は文法史を専門とする人間にとっても読み応えがある内容である。この「研究テーマ」と合わせ、巻末には「資料解説」「文献ガイド」だけでなく、「用例収集法」までもが付されている。これらは、これから研究を始めようとする学部生や院生が、文法史に興味を持ちスムーズに研究に入っていけるように、という配慮であろう。ここまでは初学者の視点に立ち文法史の研究方法を丁寧に導く概説書は他にそう多くはない。単なる「一般向け」というだけでなく、若手研究者の育成をも視野に入れて、編集されていると言える。

また、本書は、一貫して現代語との関連を重視する姿勢がとられている点も特徴的である。近年の古典語における多くの研究は、現代語研究の深化及びその実績とともに発展してきた背景がある

からだ。特にテンス・アスペクト、モダリティ、とりたてなどのテーマはその傾向が著しい。たしかに古典語研究は現在、現代語研究ひいては言語学全体に対しての貢献が求められている。その点で、共通性や一般性を見出そうとする姿勢は、非常に重要である。しかしながら一方で、根本的に文法体系の異なる古典語に対して、現代語研究における枠組みを安易に当てはめることは、古典語の本質そのものを歪めてしまう危険性があることも否めない。アスペクトといわれる助動詞「ぬ」「つ」は、一概には変化相とは言えない一面があり、同じモダリティの助動詞である古典語の「む」と現代語の「だろう」は文中での生起位置が異なりそもそもの性質が違ふ、など、そのような差異に対してのコメントもあるものの、枠組みありきにならない注意喚起がもう少し必要だったように思う。

文法史研究の面白さ・奥の深さを伝えようとする精緻な試み、現代語・方言・他言語・文学に至るまで様々な分野との橋渡しを目指す幅広い視野。本書は、単なる概説書の枠を超えて、文法史研究全体を盛りたてていこうとする気概が感じられる一冊である。

(ひつじ書房、二〇一〇年四月、一九八頁、一九〇〇円)

(いわた・みほ 本学特任研究員)